
少女（ポーボボのファンフィクション）

y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボイボボのファンフィクション
少女

【Nコード】

N0737G

【作者名】

y

【あらすじ】

朝食の席に邪ティは現れない。どうしたのだろうと柊は少女の部屋を訪れるが・・・（コメディですが、所謂女性の月経を連想させるものなのでご注意下さい）

(前書き)

集英社「ボボボーボ・ボーボボ」のファンフィクションです。各関係者様・団体とは一切の関係はありません

帝国郊外の柊の邸宅

朝食の席で、リチャード・ジノリのスープレートにビシソワーズを注ぎながら、ちらりとヘルムレの置時計を見、柊は溜息を一つついた

「どうしたんだろう邪ティは・・・もう8時過ぎてるのにーあの子が時間に遅れるなんて今までなかったのに・・・」

側面の高い椅子にちょこんと座っているパンツ丸は、カイ・ボイスンのテーブルフォークを小さな手で器用に並べながら、ん〜というように柊を見た

「昨日遅くまで俺とセラフィックゲートの11周目やってたから、まだ寝てんじゃねえかなあ・・・壊剣ティルフングを中々ティアマツトが落としてくなくなくてよー重戦士の人数分欲しいんだよなー」
持たせて解放したいんだよーと、ぶつぶつパンツ丸は呟いているが、久しぶりに長い休暇をとって、可愛い少女と楽しく過ごそうと楽しみに思っていた柊にとっては、かなり（本気で）どうでも良い

「全く・・・あまりゲームばかりやらせちゃダメだ。目が悪くなる。どうせお前が無理やり付き合わせてるんだろ？・・・この後も予定作ってるんだし・・・」

柊は壁に設置されている通信機のスイッチを入れた。それはこの広大な邸宅の全ての部屋に通じる通信機だ。邪ティの部屋のベッドサイドに通じるスイッチを押し、集音マイクに顔を近づける

「・・・邪ティさーん・・・朝ですよー。起きて下さーい」

返事は無い。微かなザーという機械音が聞こえるだけだ。本当に疲れて眠いのならば、寝させてあげたいとは思うがー

「ー柊・・・？」

酷く小さな声が通信機の向こうから聞こえてきた

「どうしたの？具合でも悪いの？なら朝食そつちまで持っていつてあげようか？」

普段の少女らしくない、何となく不安げな声に、本当に具合でも悪いのかと、柊は心配になった

「……」

返答は無い。柊は益々不安になって、少女の名を何度も呼んだ

「気分でも悪いの？薬ちゃんと飲んでるよね？今からそつちいくからー」

「……ごめん……血が、止まらないから……」

ややあつて、小さな声が聞こえた。え？と柊は耳を近づけた

「……朝、起きたら……シーツが真っ赤になっててー汚れちゃたよ……ごめん……」

柊はその言葉に思わず、ええええ？！と驚愕の声を上げた

「……昨夜から……何かヘンだな、って思ってたんだけど……どうすればいい？……」

驚きながらも、バツ、と柊はマイクに顔を近づけた

「だ、大丈夫だよ！シーツなんて僕が洗ってあげるから！今日は天気もいいしすぐ乾くよ！……って、心配しなくていいから、じつとしてて！いい？ええーと、取り敢えずは、その……何か布でもあてて……じつとしててね？いいね？用意してすぐ行くからね？」
彼らしくなく、酷く慌てて通信機にまくしたてている柊を、パンツ丸は不思議そうに見ている

「どーしたんだよアニキ……邪ティホントに具合わりーの？」

通信機のスイッチを切り、その場に呆然と突っ立っている柊にパンツ丸がててと走り寄って来た

「……朝ごはんは中止。いい？パンツ丸。今から僕が言うものをすぐに買って来て」

柊はパンツ丸を掴み上げると、ずい、と顔を近づけ、何故か声を落とすとした

「ええとね……まずはマツ ヨに行つて、生理用品買って来て」

「セイリヨウビン、ってなに？どのへんのコーナーにあんスか？」
「いーから。店員さんに聞けば分かるから。とりあえず夜用とフツ
ーの日用ね」
「あいよ」
「たぶん同じコーナーに専用のショーツもあると思うから、それも
ね」
「あいよ」
「念のためにバファ ンもね。あんまり効かないって聞くけど、し
ようがないから」
「あいよ」
「そしたら次は本屋さんに行って、「女の子の体の仕組み」的な本
を二三冊買って来て」
「オンナノコノカラダノシクミ、ってなに？どのへんのコーナーに
あんスか？」
「いーから。店員さんに聞けば分かるから。なるべく分かりやすい
ヤツ下さい、って言うんだよ」
「あい」
パンツ丸は律儀にメモを取っている。おんなのこの・・・といちい
ち声に出してメモっている
「あとね、お赤飯・・・ってココはジャパンじゃなかった。ケーキ
買って来て」
「どんなケーキ？邪ティの好きなツエラーのチョコレートケーキっ
スか？」
「いや・・・たぶん気分的に食べたいってワケじゃ・・・普通のク
リームケーキでいいよ。ホールでね」
「邪ティ生クリーム好きじゃないツスよ」
「こついう時、女の子は恥ずかしい、知られたくない反面、お祝い
して欲しい・・・ものなの（微妙）」
「へーすげえなあアニキは。やっぱなんでも知ってるんだ。男なの
に、女の子のことなんでも知ってたんだなあ」

本気ですごいなあ、と感嘆しているパンツ丸

「なるべく急いで買ってきて。いいね？邪ティは困っているんだから・・・お金落とすんじゃないよ」

小さなガマ口は何枚かのお札を入れた柎は、パンツ丸の首(?)にそれを掛けた

「え？邪ティ困ってたんだ？分かったぜ！すぐ帰って来るぜえっ」

ガマ口を握り締め、パンツ丸は扉から勢い良く出て行った

一人になった食堂で、柎は一つ、困ったような溜息をつくくと、ゆっくりと椅子に座った

確か邪ティの生成データには、女性ホルモンの分泌は少なかった

つまり、月経は無かった。月経直前の状態か？

今までもそのような行動はなかったな

邪ティはオリジナルの髪の毛から造られて

その時点のオリジナルに月経が無かったってことが

14歳にしては遅いな。まあそういう子もいるか

今はどうだか知らないが・・・

複製人間というのは成長するものなのか？

その辺の詳細データが無かった。というか以前のデータが無いのだろう。初めての研究なんだし

にしては・・・邪ティは出会った時から全く成長してないように見える。髪の毛すら伸びてない

永久にあの姿のままなのか？

よく考えると、複製人間というものは・・・

様々な考えが頭に浮かぶが、今はそんな根本的な追求は必要ないだろう。とにかく可愛い少女は困惑している筈だ。自分の身に何が起こったか、全くわからない筈だ。手の内に入れてからは、様々な常識的な事や、世の中の仕組みなどを教えてはいたが、流石にその手のことは男の自分には教えられなかった。書物でも与えて学ばせれ

ばよかったのかーというより、そのような状況が発生するなど、全く思いも寄らなかったのだ

女の子ってのは、色々難しいな

服やアクセサリを与えてるだけじゃすまないものだ

もう一度深い溜息をつくとき、柊はゆっくりと椅子から立ち上がり、邪ティの部屋に向かうべく食堂を後にした

小さなノックの音が響いた

「・・・邪ティ？入るよ・・・」

ゆっくりと柊は扉を開け、半身を部屋内に入れた。カーテンがひかれたままの室内は、酷く薄暗かった

「・・・大丈夫？」

邪ティはベッド端に座り、俯いてタオルで顔を覆っていた

「・・・そっちについていいかな？」

常に無いその様子に、近づくのは躊躇われるが、ほっっておくわけにはいかない。柊はゆっくりとベッドに近づいた

「・・・柊・・・ごめん・・・」

布をあてたまま、邪ティは小さな声を発する。くぐもったようなその弱弱しい声に柊は酷く動揺した

「・・・邪ティ、大丈夫だよ。普通のことだからさ。気分悪いかもしれないけど、今薬買って来させてるから、すぐラクになるよ」
ベッド端に丸められた、所々が赤く染まっているシーツをちらりと見て、柊は邪ティを安心させようと、優しく語りかけた

「シーツのことなんて気にしなくていいからさ。今日のピクニックもまた今度にすればいいよー動ける？シーツ替えてあげるからー」

「・・・いい。自分でやる・・・」

邪ティは柎に近づくな、というように手をあげた

「……怒ってない……の？」

何だか、今日の少女はやけにおとなしい。というよりも、怯えてい
るような。いつものクールな、少年のようなフィンキとは全く違う。
常に無いその仕草に――ああ、女性が月経を迎えるというのはこ
ういうものなのか、と柎は思った――と、同時に――僅かに瞳
を潤ませて、縋るような――所謂男性を誘うような扇情的な、女
性らしい雰囲気を開始した幼い少女に、子供だとばかり思ってい
た男の心中に、不謹慎な感情が浮かぶ――

「……怒るわけないでしょ。なんでそんなこと思うの？」

その心中を隠し、少女を見る。ふと、邪ティは柎に背中を向けた。
そして意を決したように口を開く

「だって……昨夜私遅くまでゲームやって、チョコレート食べ過
ぎたから……」

はい？

「いつも夜更かしするなって怒るじゃんお前……夜遅くお菓子食
べるのも体に悪いからって――」

完全に固まっている柎に気付かず、邪ティは言葉を続ける

「朝起きたら――チョコレート食べ過ぎたのかな……鼻から血
が出て……中々止まらなくて。息は苦しいし、どうせお前のお
説教長いつて思ったし……止まるまで部屋にいようって思っ
て――あ、やっと止まったみたいだ」

布を顔から離し、邪ティはホツとしたように顔を上げた

「アニキ――！買ってきたぜ――ッ！」

ばん！と半開きの扉が勢い良く開いて、幾つかの袋とケーキの箱を
持ったパンツ丸が飛び込んできた

「とにかくゲーム禁止！お菓子も禁止！夜更かし絶対禁止！僕がいないからって、不規則な生活は絶対に許さないよ！」

食堂のシャンデリアにパンツ丸は吊り下げられ、邪ティは椅子に座らされ、俯きながら、まくしたてる柊のお説教をおとなしく聞いていた

「パンツ丸！お前がちゃんと見てなきゃダメだろう！邪ティもパンツ丸に無理に付き合わなくていいんだよ！？あんなパンツほつといて12時になつたら、ちゃんと寝なさい！！」

「アニキー降ろしてえええ・・・」

「黙ってる！大体お前が全て悪い！全く・・・折角休暇を取って、楽しく過ごそうと思ってたのにー」

ふ、と邪ティが柊の手に触れた

「・・・ごめん柊」

申し訳なさそうに見上げてくる紅い瞳

「・・・反省してる。もう夜更かししないよ。夜お菓子も食べないから・・・」

うつ、と柊の動きが止まる。普段のクールな表情とは全く違う、困ったような、許しを請うような、縋るようなーその可愛い顔に思わず見惚れるーが

「・・・きよ、今日は許さないからね。僕がどれだけ心配したかーー」

誤魔化されてなるものか、とその手を払おうとすると

「ごめん」

邪ティの腕が柊の首に回り・・・一瞬、頬に唇が触れた

「・・・もう許してくれよ」

呆然としている柊に、唇を離して邪ティはもう一度、もうしないから、と謝罪した

待て

ちよつと待て

女性ホルモンガンガンじゃないか

いつの間にこんな

女そのものーののような媚態を身につけたんだ

こんなこと教えてないぞ

・・・一体どこで覚えたんだ

邪ティは柵のお説教が止まった隙に、素早くパンツ丸を下ろしその胸に抱え、窓から逃げてしまった。一人になった食堂で、柵は立ち尽くしたまま、今後はなるべく休暇を取って、家を空けないようにしようとー目を離さないようにしようと、自らの心に誓った

「いないーなあ！な！邪ティー俺にもアレしてくれよ」

窓から飛び出て、庭を走っている邪ティにパンツ丸が話しかけた

「バーカ。全く柵のお説教は長いんだよな」

「ホーントだぜえ。ハムスターにダイレクトアサルトかましてえし（ムリ）・・・アニキが仕事に戻ったら今度こそやつちまおうぜ」

この辺でいいか、と大きな木の元に邪ティは座った

「・・・アニキ固まつてたな。アレってさ、この間観たDVDでヒロインがやつてたヤツだよな？ホントにアレ、効果あんだな。アニキあの映画の俳優と同じ反応だったもんな」

所々ほつれているパンツ丸を草の上に降ろし、邪ティは不思議そうな表情を浮かべた

「・・・私もあんなに効果があるとは思わなかったよ。でもなんでだろうな？なんで柵はいきなり固まつて説教やめたんだろ？」

「知んね」

少女と小さな生物は、互いになんでだろうな？と顔を見合わせた

「朝食食べ損ねたからおなか空いたな・・・パンツ丸、お前ちよつ

と戻ってなんか食べ物持ってこいよ」

「えーやだぜ！アニキにまた捕まったら、今度は吊り下げられるだけじゃすまねえよー！」

少女はいいからいってこい、とパンツ丸を放り投げ、クスリと笑った

今度からお説教を食らうときはアレをすればいいんだ

普段穏やかで冷静な柊の呆然とした表情を思い出し、人工的に造られた少女はもう一度笑った

(後書き)

読んで下さってありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0737g/>

少女（ポーボボのファンフィクション）

2010年10月15日22時01分発行